

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場するイチョウと二人の男の子

石井竹夫

帝京平成大学薬学部
e-mail : t.ishii@thu.ac.jp

Ginkgo and Two Boys Appeared in “Night on the Milky Way Train” Written by Kenji Miyazawa

Takeo ISHII

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Teikyo Heisei University

キーワード: 文学と植物のかかわり, 銀杏

『銀河鉄道の夜』に登場する「幻の匂い」に関して考察しているとき(石井, 2013), 理解できずに私の心に強く残ったものがあった。それは、なぜジョバンニとカンパネラが同時に同じ気配と予知を伴った幻嗅を体験したのかということである。2人は友人という以外に何か関係があるのだろうか。カンパネラという名はユートピア物語『太陽の都 *La Citta' del Sole*』(1602)で知られるイタリアの哲学者、トマーゾ・カンパネラ(1568 - 1639)の名からとったものと推定されている(トマーゾの幼名はジョヴァンニ・ドミンコ)。2人の関係に関して、賢治研究家の天沢(1989)はトマーゾ・カンパネラの幼名に注目して、カンパネラ=ジョバンニの隠れた「双子性」を指摘している。『銀河鉄道の夜』の草稿を見た天沢は、賢治が何度かジョバンニとカンパネラを混同ないし混同しかけていたと言っている。しかし、「双子性」とはあいまいな表現である。一卵性双生児、二卵性双生児、双子のような兄弟、双子のような仲の良い友人などと色々と考えられる。ここではどのような双子なのか明らかにしたい。2人の関係を考察するにあたってヒントを与えてくれるのが第七章の「北十字とプリオシン海岸」に出てくる以下の文章である。

「もうぢき白鳥の停車場だねえ。」

「あゝ、十一時かつきりには着くんだよ。」

(中略)

さはやかな秋の時計の盤面(ダイヤル)には、青く妬(や)かれたはがねの二本の針が、くつきり十一時を指しました。みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなってしまひました。

[二十分停車]と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」ジョバンニが云

ひました。

「降りよう。」

二人は一度にはねあがってドアを飛び出して改札口へかけて行きました。ところが改札口には、明るい紫がかつた電燈が、一つ点(つ)いてゐるばかり、誰も居ませんでした。そこら中を見ても、駅長や赤帽らしい人の、影もなかったのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のやうに見える銀杏(いてふ)の木に囲まれた、小さな広場に出ました。そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中を通過してゐました。

さきに降りた人たちは、もうどこかへ行ったか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、肩をならべて行きますと、二人の影は、ちやうど四方に窓のある屋(へや)の中の、二本の柱の影のやうに、また二つの車輪の輻(や)のやうに幾本も幾本も四方へ出るのです。(下線は著者)

これは、主人公のジョバンニと友人のカンパネラが夢の中で銀河鉄道の列車に乗り込み、最初の停車場である「白鳥の停車場」に到着する場面である。文章を注意深く読むと、二(あるいはローマ数字のIIに相当する文字)という数字が短い文章の中に繰り返し登場する。例えば、上記の引用文に「十一時(11時と書けばローマ数字のIIと類似する)」が2回、「二人」が5回、「二本の針」、「二十分」、「二本の柱」、「二つの車輪の輻」がそれぞれ1回ずつ記載されている。これだけ二という数字を繰り返されれば、なぜだろうと疑問に思い、作者の意図を詮索したいと思うのは自然であろう。この文章の中に、二人の関係を明らかにするヒントが隠されていると思われる。ヒントとなる言葉は、「銀杏」、「白鳥の停車場」そして「車輪の輻」である。それぞれ、植物学、文学、神話、天文学そして宗教と照らし合わせて考察してみたい。

2012年12月20日受付。

1. 銀杏の木と賢治の童話

イチヨウ (*Ginkgo biloba* L.) は仏教の伝来に伴って中国から移入されたものであるという (寺や神社の境内に多い)。法華經に帰依した賢治はイチヨウを作品に数多く取り入れている。具体的な使われ方としては、「いてふ」(詩『高架線』)、「いてふの男の子」, 「銀杏の木」(童話『いてふの実』)、「いてふの葉」, 「銀杏並樹」(詩『真空溶媒』)、「いてふのこずえ」(詩『春と修羅』) などである。代表的な作品である『いてふの実』は、『銀河鉄道の夜』の前に書かれた賢治の短編童話 (1921年作: 賢治25歳) で「二人のいてふの男の子」として登場する。「二人」という表現は、イチヨウの木の短枝の先から出る長い花柄の先にある二つの実を擬人化したものである。仏教用語に「慈悲」という言葉があるが、これは他の生命に対して自他怨親(おんしん)のない平等な気持ちをもつことを言う。賢治の童話作品には、動物や植物が口をきいたり歩いたりというのがたくさん出てくる。これは、人間も動物も植物も命あるものは皆平等であるという仏教の慈悲の考え方および輪廻転生の考え方に由来する。また、イチヨウはイチイヤマツ (いずれも『銀河鉄道の夜』に登場する) などと共に裸子植物に分類されるが、精子による有性生殖を行うという点で他の裸子植物や被子植物と大きく異なっている (後述する)。イチヨウに雄雌 (雌雄異株) が有り、精子による有性生殖を行うということは擬人化による違和感の表出を少なくさせている。

さうです。この銀杏の木はお母さんでした。

今年千人の黄金色の子供が生まれたのです。

そして今日こそ子供らがみんな一緒に旅に発(た)つのです。

(中略)

木の一番一番高い処に居た二人のいてふの男の子が云ひました。

「そら、もう明るくなったぞ。嬉しいなあ。僕はきっと黄金色のお星さまになるんだよ。」

「僕もなるよ。きっとこゝから落ちればすぐに北風が空へ連れてって呉れるだらうね。」

(中略)

その下でもう二人が云ひました。

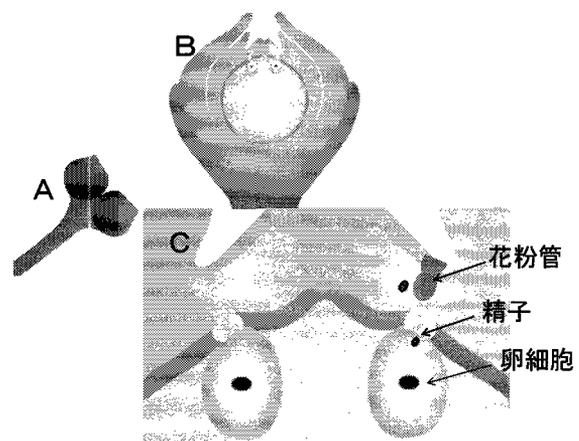
「僕は一番はじめに杏の王様のお城をたづねるよ。そしてお姫様をさらって行ったばけ物を退治するんだ。そんなばけ物がきっとどこかにあるね。」

(『いてふの実』 宮沢賢治) 下線は著者

賢治が「銀杏の木」を「お母さん」と呼ぶのは、イチヨウの巨木の枝から垂れ下がる円錐形の突起(気根)によると思われる。この突起を「乳房」に見立てて子宝

に恵まれるよう、あるいは安産のシンボルとして崇められることもある (雑司ヶ谷の鬼子母神の大イチヨウや北金ヶ沢の垂乳根の大イチヨウが有名)。

イチヨウの生殖メカニズムは複雑であり神秘的でもある。イチヨウの雄の生殖器官は小孢子嚢となって短枝の先端に形成される。この雄性小孢子嚢穂のおしべは成熟すると縦に裂け、4月から5月上旬にかけて花粉が飛び出していく。雌性孢子嚢穂は短枝の先端に普通2個の胚珠を付けてくる。花粉は胚珠に到達すると胚珠内の花粉室に入る。そこで雌しべから養分をもらって約3か月を過ごし、無事に成長すると精子になる。この精子が胚珠内の胚囊上部の2個の卵細胞を目指して泳いでいく (第1図)。東京の小石川植物園の



第1図. イチヨウの受精。

Aは花柄の先の2個の胚珠, BとCは雌花の断面図を示す。理科ネットワーク (2012) の動画を基に作画。

イチヨウでは9月10日前後に受精が観察されるという。二つの実のそれぞれの胚囊にある2個の卵細胞は受精するが胚に育つのはそれぞれ原則の一つのみである (稀に二つ)。胚珠の外側を珠皮と呼ぶ。珠皮は発達して種皮となるが、肉質で悪臭のする外層, 堅い中層, 膜質の内層に分かれる。「ぎんなん」のかたい殻は中層である。すなわち、イチヨウの実と称するものは、種子 (ぎんなん) とその種子の外層が肉質化したものである。花柄の先端にある2個の実が落下して発芽するのは翌年の5月頃である (佐々木, 1993)。このようなイチヨウの生殖の生態やメカニズムの秘密は、賢治が生まれた年である1896年に東京大学植物学教室の平瀬作五郎がイチヨウの精子を発見したことによって解明された (本間, 2004)。すなわち、植物学に精通していた賢治は『銀河鉄道の夜』を制作していたときにはこの事実の多くを知っていたはずである。

『銀河鉄道の夜』に登場するイチヨウは、「停車場の前の、水晶細工のやうに見える銀杏 (いてふ) の木」として登場する。イチヨウの実が登場してこない。し

かし、第七章の「ジョバンニの切符」で蠅の火の逸話の前に、男の子（ただし）が「あれきつと双子のお星さまのお宮だよ」と窓の外をさして叫ぶ場面がある。この「双子のお星さまのお宮」に対して「小さな水晶でもこさへたやうな二つのお宮」の説明がつく。「銀杏」と「双子のお星さまのお宮」は「水晶のやう」と同一の形容語が付くこと、および物語の季節が秋であることを考えれば、「水晶細工のやうに見える銀杏（いてふ）の木」にはたくさんの双子のイチヨウの実がなっていると推測してもおかしくない。賢治は盛岡高等農林学校時代に宝石商になる夢を持っていて、宝石や印材の研磨、指輪の製造・鍍金などの事業を考えていた（宮沢賢治を愛する会、1996）。それゆえ、賢治が宝石や印材を売るために「風水」や「占星術」に関心を持っていたということは容易に想像できる。「水晶細工のやうに見える銀杏（いてふ）の木」は賢治の作品に多用される「黄水晶（シトリン）」を連想させ、「黄水晶」は「占星術」では黄道十二宮の双児宮（双子座）に対応する。

一つの花柄の先端に出来る2個の実に対して双子かどうか論ずるのは非科学的のような気もするが、あえて言うなら双子のような兄弟実（？）であり、まれに一つの実の中に二つの種子が出来る場合があるがこれは二卵性双生実（？）であろう。

2. 白鳥座にまつわるギリシャ神話

賢治は、ギリシャ神話を愛読したとされる（原、1999）。白鳥座にまつわるギリシャ神話として有名な逸話が残っている（原、1996）。神話では、大神ゼウスが、天上から地上で水浴びをしている絶世の美女であるギリシャのスパルタ王テュンダレオスの王妃レダ（Leda）を見染め、愛の女神アプロディアの助力のもと白鳥に化身し思いを遂げる。白鳥の去ったあと、レダは大きな卵を二つ産み落とす。それぞれから双生児が生まれるが、片方からはカストル（兄）とポリュデウケス（弟：ポルックス）という男の双生児が、もう一つの卵からはヘレネとクリュタイムストラという女の双生児である。一説では、兄のカストルは人間であるレダの夫でスパルタ王の子だったので、弟のポリュデウケスは神性を持つ不死であったが、カストルはいつか死すべき運命をもっていた。兄が戦死したのち、弟のポリュデウケスは神性を兄に与え、ゼウスから「双子座」として夜空に打ち上げられる。

賢治は、ジョバンニとカンパネルラの隠された関係の秘密を解くカギを二の数字が多用される場面に「銀杏」と「白鳥の停車場」という植物と星座の名で埋め込んだと思われる。

3. 『法華経』に出てくる兄弟の話

「車輪の輻（や）」とは、車のスポーク（spoke）の

ことであり、その放射線状に広がる様は仏の手の掌や足の裏にある千の輻をもつ車輪の形の文様（千輻輪相；せんぷくりんそう）あるいは仏像の背にある光の文様（光背；こうはい）を連想させる。また、引用文の「二人の影は、ちやうど四方に窓のある屋（へや）の中の、二本の柱の影のやうに、また二つの車輪の輻（や）のやうに幾本も幾本も四方へ出るのでした」という表現は宗教的な荘厳さと厳肅さを際立たせている。吉本（2012）は、ジョバンニとカンパネルラが『法華経』の第二十七章「妙莊嚴王本事品」に出てくる二人の王子・浄蔵（兄）と浄眼（弟）になぞらえられるとした。この章には、二人の兄弟が母・浄徳とともに外道（ここでは法華経以外の信仰）の教えに執着している父・妙莊嚴王（みょうしょうごんのう）を仏道に帰依（きえ）させた話が説かれている。第二十七章では妙莊嚴王が仏法の修行を志すようになり現在の華徳菩薩に、浄徳夫人は光照莊嚴相菩薩に、浄蔵、浄眼の二人は現在の薬王菩薩と薬上菩薩になったという因縁も語られる。『法華経』の第二十三章「薬王菩薩本事品」には、薬王菩薩が前世において、みずから妙香を服し香油を身に塗って、その身を燃やし仏を供養した一切衆生熹見菩薩であったとも説かれている（坂本・岩本、1976）。一切衆生熹見菩薩に関しては、前報で「楊（やなぎ）＝マッチの軸木」や「蠅の火」の逸話と関連させて論じた（石井、2011）。

菩薩とは菩提薩埵（ぼたいさつた）の略である。菩提とは「ほんとうの悟り」のことで、別の言葉で言いかえれば「ほんとうの幸い」のことである。また、薩埵とは「求める人」のことである。すなわち、菩薩とは「ほんとうの幸いを求める人」のことである。賢治は「ほんとうの幸いを求める」という菩薩そのものになりたかった人であるので、賢治は物語を書き進めるにあたって自分の願望を物語の主人公であるジョバンニに託した。ジョバンニは物語の中で蠅の逸話が出たのち、「あのさそりのやうにほんたうにみんなの幸いのためならば僕の中からだなんか百べん灼（や）いてもかまはない」と言う。まさに、ジョバンニも菩薩（薬王菩薩あるいは一切衆生熹見菩薩）になりたいと願っている。

ジョバンニとカンパネルラの隠された関係の秘密を「銀杏」、「白鳥の停車場」「そして「車輪の輻」を基に解いていくと、同一の母をもつ兄弟ということになる。二人が同級生ということと顔が似てないらしいということも考慮すれば二卵性双生児であろう。多分、賢治は二卵性双生児のジョバンニとカンパネルラを念頭に物語を書きすすめたと思われる。『銀河鉄道の夜』の草稿を見た天沢は、賢治が何度かジョバンニとカンパネルラを混同ないし混同しかけていたと言っているが、これは賢治が2人を二卵性双生児として見ていた

か、あるいは設定しようとしていたからであると思われる。なぜ物語で、賢治は二人を兄弟とせず友人として登場させたかについての疑問が生じるが、これはよく分からないところであり、法華經の思想とそれに基づく生命倫理をもって万人を教化しようとする試みが表に出るのを意識的に避けたのかもしれない。ちなみに、『法華經』の焼身供養の教義（第二十三章「薬王菩薩本事品」）が込められている物語の核心部分である「蠅の火」の逸話は、キリスト教徒である少女（かほる）に語らせている。

それでは、最初の疑問に戻ってなぜジョバンニとカンパネラが列車の中で同時に同じ気配と予知を伴った幻嗅を体験したのかについて考察してみる。これも、多分法華經信仰と関係していると思われる。仏教では、菩薩になろうとして修行（菩薩行）すると神通力（じんずうりき）を獲得することが出来るとなっている。神通力とは、『法華經』の第五章「薬草喻品」や第七章「化城喻品」にも記載されており、天眼通（てんげんつう）－未来世の生死の相を知る力、天耳通（てんじつう）－通常人の聞き得ない音を聞く能力、他心通（たしんつう）－他人の考えていることを知る能力、宿命通（しゅくみょうつう）－自他の過去の生死の相を知る力、神界通（しんきょうつう）－自由に欲する所に現れ得る能力、漏尽通（ろじんつう）－現在の苦相を知って一切の煩惱を断ずる力の六つの力（六神通）である（坂本・岩本，1976）。賢治は、超感覚の能力を有するという自らの資質（石井，2013）を土台に苦しい修練によって六神通の能力を身につけようとしたはずであり、またジョバンニとカンパネラにこれらの力の一部あるいは多くを与えたはずである。ジョバンニが持っている「何処でも勝手に歩ける通行券」には「おかしな十ばかりの字が印刷してある」とあるが、

これは神界通のバーリ語iddhividhāの十文字であろう。すなわち、賢治は二人を薬王菩薩と薬上菩薩という兄弟の菩薩の前世の姿に戻して予知を伴った幻嗅を体験させたと思われる。

引用文献

- 天沢退二郎. 1989. 注解. pp.313-330. 宮沢賢治（著）. 新版銀河鉄道の夜. 新潮文庫. 東京.
- 原 恵. 1996. 新装改訂版 星座の神話－星座史と星名の意味－. 恒星社恒星閣. 東京.
- 原 子朗. 1999. 新宮沢賢治語彙辞典. 東京書籍. 東京.
- 本間健彦. 2004. 「イチョウ精子発見」の検証－平瀬作五郎の生涯. 新泉社. 東京.
- 石井竹夫. 2011. 宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場する植物. 人植関係学誌. 11(1):21-24.
- 石井竹夫. 2013. 宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場する幻の匂い(前編). 人植関係学誌. 12(2) : 21-24.
- 宮沢賢治. 1986. 文庫版宮沢賢治全集10巻. 筑摩書房. 東京.
- 宮沢賢治を愛する会(編). 1996. 宮沢賢治 エピソード313. 扶桑社. 東京.
- 理科ネットワーク. 2012.12.22. (調べた日付). 裸子植物の生活環・イチョウの受精(動画). 独立行政法人科学技術振興機構(JST).
<http://rikanet2.jst.go.jp/outline.php?db=ippan&id=460300170>
- 坂本幸男・岩本 裕(翻訳). 1976. 文庫版法華經(全3冊). 岩波書店. 東京.
- 佐々木紀子(編集). 1993. 学研ハイベスト教科辞典 植物の世界. 学習研究社. 東京.
- 吉本隆明. 2012. 宮沢賢治の世界. 筑摩書房. 東京